



いわさきちひろ生誕100年「Life 展」 まなざしのゆくえ 大巻伸嗣

●2018年3月1日(木)~5月12日(土)

主催：ちひろ美術館

特別協賛：株式会社 **ジャクエツ**

助成：公益財団法人 **花王 芸術・科学財団**

協力：株式会社エイブラフト、華陽堂、菌部秀徳、中矢清司

後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

いわさきちひろが大切に描いたもの——「Life」。

いわさきちひろの生誕100年にあたる2018年、さまざまな分野で活躍する作家が「Life」をテーマにちひろとコラボレートします。



図1 いわさきちひろ カーテンにかくれる少女 「あめのひのおるすばん」(至光社)より 1968年



図2 大巻伸嗣 Echoes-Crystallization 2015年 © Shinji Ohmaki Studio

新たなちひろとの出会い

生涯、子どもを描き続けた画家・いわさきちひろ。無垢なまなざしのあかちゃんや感受性の豊かな子どもたちを、四季折々の草花などに重ねて、余白をいかしたやわらかな水彩で描き、日常のなげない光景から「Life = いのち」そのものをとらえています。

一方、現代日本を代表する美術家のひとり、大巻伸嗣は、草花を象徴的なモチーフのひとつとして、消えゆくものの儚さと「Life = 生」の両極をとらえ、圧倒的な物質性や、物質性を無化するような造形力で、その場に内在するイメージを鮮やかに表現しています。例えば「Echoes-Crystallization」と題したシリーズは、白いアクリル板に水晶粉を混ぜた白い修正液で絶滅危惧植物を屏風絵のように装飾的に描いた作品です(図2・12)。漆黒の空間に展示された作品を一瞥すると、なにも描かれていない空白のように見えます。しかし、作品に向き合っていると、光を受けて繊細な植物の輪郭が浮き上がり、線に沿って水晶粉が静かに輝きを放ち、まるで光が結晶化したように見えてきます。そして、集合体となった光は、暗闇のなかで精霊のようにゆらめきます(図11)。そこに身を置けば、目には見えない、いのちの連なりや、再生されたいのちが心のなかに反響(echo)するように感じられます。

Lifeをテーマとしながら、対照的なアプローチを行うちひろと大巻のコラボレーションにより、新たな世界が開かれます。



〈コラボレーション作家〉

大巻伸嗣 (おおまきしんじ)

1971年~

岐阜県生まれ。現代美術作家。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。東京藝術大学美術学部彫刻科、GAP専攻教授。「空間」「時間」

「重力」「記憶」をキーワードに、「物質と空間・存在」をテーマとし

て制作活動を展開。見ることのできないものを可視化し、体感させることで、新たな身体的、知覚的空間を作り出すことを試みる。空間を非日常的な世界に容容させ、鑑賞者の身体感覚を呼び覚ますダイナミックなインスタレーション作品を発表。

大巻伸嗣からのメッセージ

ちひろさんは、水彩のにじみをいかして、紙に絵筆が乗った、その一瞬に、色彩やかたち、その場の空気や情感までもとらえています。それは、一瞬が永遠になるときともいえるでしょう。僕のインスタレーションを通じて、そういう瞬間を共有できればと思います。絵本やカレンダーなどを通して、ちひろさんの絵はずでにさまざまなところで人々の記憶とつながっています。今を生きる僕たちのまなざしが、今回の展示を通して、時空を超え、重なったりズレたりする。そこに新たな面白さが生まれるでしょう。



図3 いわさきちひろ 紫色の馬と少女 1971年



図4 いわさきちひろ 木の葉にすわる子ども 1966年



図5 いわさきちひろ 青い鳥と少女 1972年



図6 いわさきちひろ
夜の国で青い鳥をつかまえるチルチルとミチル
『青い鳥』(世界文化社/講談社)より 1969年

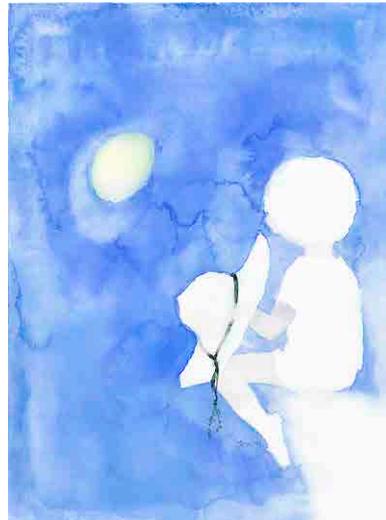


図7 いわさきちひろ 月を見る少年 1970年



図8 いわさきちひろ 焔のなかの母と子
『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)より 1973年

まなざしの先にあるもの

ちひろが亡くなるまでの22年間で過ごした場所に建つちひろ美術館・東京。ちひろが数々の作品をうみだしたアトリエを中心に据え、ここにはちひろの記憶が濃厚に残されています。大巻は、この場所のあちこちにちひろのまなざしが感じられるといいます。

ちひろ自身のまなざし、そして、ちひろが描いた子どもたちのまなざしはなにをとらえているのでしょうか。愛する家族、心を動かされる自然の光景、空想の世界、そしてすべての希望を打ち砕く戦火……。そのまなざしからは、いのちの尊い姿が浮かび上がってきます。大巻は、ちひろがとらえたLife—いのちを、インスタレーションで増幅させ、わたし

たちが未来に向けるまなざしと交差する空間を創出し、わたしたちに「生きる力」を喚起します。

本展では、全館を使い、1階部分では、水面下に広がる記憶や傷跡やいのちの連なりをイメージして、2階部分では、水面上の大海原から広がるイマジネーションの旅をイメージして、インスタレーションを展開します。ちひろが描いた「まなざし」に導かれ、戦争や災害の記憶(図10)、世界と自分を分かるところから生まれ出る描線、自分のなかに映し出される世界、そして想像の世界に乗り出す旅へと誘います(図9)。大巻によるEchoes-Crystallizationシリーズの新作も展示します。

(原島恵)

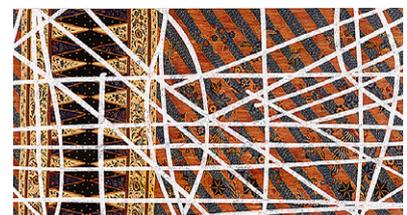


図9 大巻伸嗣
Grand Voyage : Passage and Time 2014年
© Shinji Ohmaki Studio
インドネシアのアンティークのパティックのうえに、現地に古来から伝わる海図をモチーフとして描いた作品



図10 大巻伸嗣 Echoes - Genius Loci 2017年
(YCC ヨコハマ創造都市センターでの展示風景)
Photo : Ken KATO © Shinji Ohmaki Studio



図11 大巻伸嗣 Echoes - Crystallization 2015年
© Shinji Ohmaki Studio



図12 大巻伸嗣 Echoes - Crystallization 2015年
© Shinji Ohmaki Studio

いわさきちひろは、1918年（大正7年）12月15日に生まれました。ちひろの没後3年目の1977年に開館したちひろ美術館では、以来ちひろをずっと見つめ、展覧会をはじめさまざまな活動を通して、その画業や人物像、絵に込められた想いを伝えてきました。そして、ちひろの生誕100年を迎える2018年、「Life」をテーマに、新たなプロジェクトを立ち上げます。

ちひろが絵を描いていた時代から大きな時代の変化を経た今、どのように次の世代にちひろを伝えていけばよいのか——長嶋りかこさんをアートディレクターに迎え、ちひろの新たな伝え方とともに考えていくなかで、この「Life」というテーマが生まれました。

「Life」は、いのちや生命の力が本義ですが、ほかにも、いきもの、人生、生涯、生活、暮らし方、活気、生きがいといった広い意味を持つことばです。ちひろが大切に思い、描いたものは、まさにこれでした。子どもたちのいきいきとした姿、可憐な花や小鳥たち、ささやかな暮らし、そして、いのちそのもの。

日本が戦争へと突き進むなかで娘時代を過ごしたちひろは、あたりまえのようにある生命や生活のはかなさを知っていました。だからこそ身近ないのちをじっくりしみ、なによりかけがえのないものとして、みずみずしい色彩で包み込むように描き続けました。

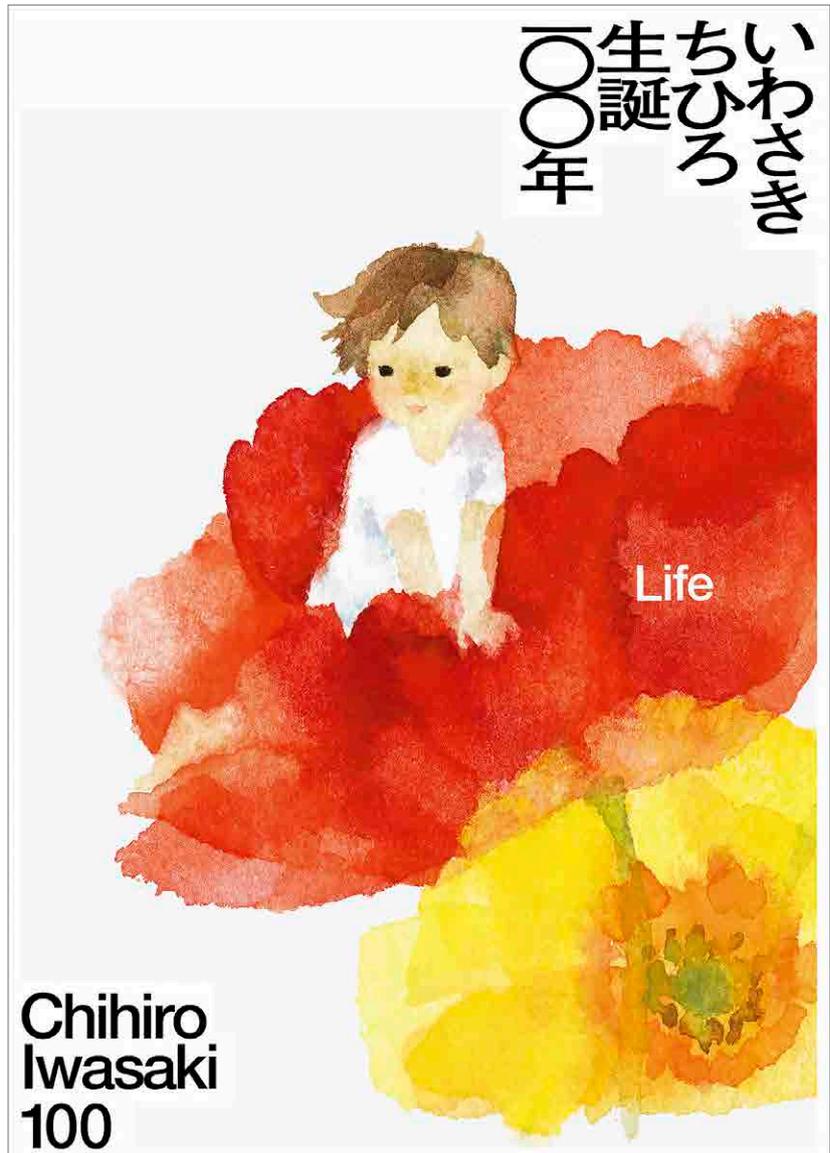
ちひろが絵を描いた時代から、半世紀近いときが経ちました。しかし、あらゆる情報があふれ、世界中の人たちと交信ができるようになった現代も、世界各地で戦争が起き、貧困や差別によっていのちが粗末にされている現実があります。

ちひろの絵は、時代を超えて、いのちの大切さを語り続けています。その声に耳を傾けながら、今を生きる私たちの「Life」を考えていきたいと思います。

東京・安曇野のちひろ美術館で、1年を通じて開催する「Life展」では、さまざまな分野で活躍する作家たちとコラボレートします。

今、まさに「Life」をテーマに取り組んでいる作家。ちひろをインスピレーションのもととして新たな作品を生み出す作家。ちひろと響き合う感性を持つ作家。そうした7組の作家たちとのコラボレーションを通して、いわさきちひろの新たな世界を開いていきます。

（上島史子）



生誕100年のメインビジュアルは「けしの花のなかのあかちゃん」（1960年代後半）です。

いわさきちひろ生誕100年「Life展」

- ◆まなざしのゆくえ／大巻伸嗣（アーティスト）
3月1日（木）～5月12日（土） ちひろ美術館・東京
- ◆あそぶ／plaplax（アートユニット）
3月1日（木）～5月7日（月） 安曇野ちひろ美術館
7月28日（土）～10月28日（日） ちひろ美術館・東京
- ◆ひろしま／石内都（写真家）
5月12日（土）～7月16日（月・祝） 安曇野ちひろ美術館
- ◆着るをたのしむ／spoken words project（ファッションブランド）
5月19日（土）～7月22日（日） ちひろ美術館・東京
- ◆子どものへや／トラフ建築設計事務所（建築家）
7月21日（土）～9月25日（火） 安曇野ちひろ美術館
- ◆みんないきてる／谷川俊太郎（詩人）
9月29日（土）～12月16日（日） 安曇野ちひろ美術館
- ◆作家で、母で つくる そだてる／長島有里枝（アーティスト）
11月3日（土・祝）～2019年1月31日（木） ちひろ美術館・東京

2017年11月12日(日) 小野明×土井章史 対談「日本の絵本の過去・現在・未来」

1990年代からの絵本をリードしてきた2人の編集者に、絵本のこれまでとこれからについて語って頂きました。(上島史子) 月刊絵本「こどものとも」

小野：現代の絵本に直接つながるのは、1956年に創刊した福音館書店の「こどものとも」からだとは思っています。単行本みたいな絵本はまだ少なかった時代に、松居直さんが月刊でこれを出した。土井：最初は作・絵が違う人なんだよね。



「こどものとも」創刊号
『ピップとちようちよう』
与田準一・作
堀文子・絵
福音館書店 1956年

小野：文と絵が別ならまず先に文での判断ができる。文の段階でいけるとしてから、きつと絵描きさんに渡したと思うんだよね。絵は一枚絵としてより、物語に即した絵の描き方ができそうな人に頼んでいる。絵雑誌と違って、物語を支える何枚にもわたる絵を描くわけだから。それは大転換だと思う。

土井：初めのころのものは、まだ右往左往しながらやっていた気がする。松居さんは編集長もやって、営業や啓蒙活動もたくさんして忙しかっただろうし、毎月つくらなくちゃいけないから、そんなに厳密ではなく、この文にこの画家を合わせたらおもしろいんじゃないかという感じでやっていたと思うんだよね。前例がないところから傑作は出る。だから「こどものとも」から古典になるような、パワフルな絵本がたくさん出ているね。

「イメージの森」シリーズ

土井：「イメージの森」シリーズは1989

年から始めたんだよね。僕が30代かな。僕は一枚漫画から来た人間で絵本はそんなに興味がなかったんだけど、長新太と井上洋介がすごくおもしろいと思って10年くらいずっと追いかけてるうちに、だんだん片山健も宇野亜喜良も和田誠も、吉田カツも若手の荒井良二も……おもしろい人がいっぱいいる、と。「メリーさんの絵本」という変な絵本シリーズを個人的に出していたのでなんとなく作家との付き合いもあって、バブルの余韻が残っていた時代でもあったので、ほるぷ出版で「子どもから大人まで喜ばれる絵本」をやろうってことになった。もう僕としては、好きな作家に依頼する、なかが出てきても構わないと。「子どもの絵本」という思想も持っていないから、とにかく作家とおもしろい絵本をつくらうっていう、パワーだけなんですよ。



「ユックリとジョジョニ」
荒井良二・作
ほるぷ出版 1991年

小野：確かに「イメージの森」のシリーズは、子どもど真ん中って感じではないよね。あのころ、土井さんは同時にいろんなところで仕掛けてたよね。

土井：リプロポートで平野甲賀さんとの企画で大人向けの絵本シリーズを立ち上げたり、あかね書房の特色刷りのシリーズを出したり。学研の月刊絵本「おはなしブーカ」では、子どものエンターテインメントとしての絵本を意識しましたね。

これからの絵本

小野：1991年から僕ら2人で「あとさき塾」をずっと続けているのだけど、90年

代の10年間は、かなりの数の新人をあとさき塾の人が占めていたんじゃないかな。僕らは編集者であると同時に、作家になろうとしている人たちと常に接しているから、これからの絵本の未来図をちょっとは推測できるんです。近頃塾に来る人と話をしていると、絵本を自己表現のためのツールとする意識が昔よりちょっと強い気がする。だから他の人の絵本、あんまり見てないね。

土井：小野さんは千冊読めっていうからね。僕は百冊でいいよっていうんだけど。

小野：千冊読めば絵本がなにかわかるし、自己表現を高めることにもなると思うんですけどね。新しい世代の絵本作家がこれからもたくさん出てきてほしいし、予測を全く超えるものを常に見たいわけです。その鍵になる作家だと僕が思うのはミロコマチコさん。あの人の在り方が、これからの日本の絵本のなかで、どう動いていくのかがすごく興味がある。

土井：作家性の強い作家の仕事は、編集者が一ファンになって広げていくからね。

小野：この作家の絵本をつくりたいという編集者がいて、出版社がOKして絵本は出る。土井さんが企画・編集した「イメージの森」は、明かに僕らの後の、第2、3世代の編集者に影響を与えているわけです。僕のなかでは、「イメージの森」現象だと思っていて、あのシリーズのつくったある感覚をいろんな編集者と作家が共有している。編集者の現状から考えたら、日本の絵本の歴史のなかで今が一番おもしろい時期じゃないかというくらい、バリエーションが広がっていると思います。

2017年12月2日(土) 野上暁講演会 「戦時下の言論統制と絵本」

児童文化評論家の野上暁さんに、戦時下の絵本が子どもに伝えていたことをテーマにご講演頂きました。(中平洋子) 「戦時下の絵本は、あまり検証されてきていません。戦災で焼失、または責任追及を恐れた出版社が意図的に焼却・隠ぺいし、資料が乏しい事実に加え、戦時下は子どもの本の出版が非常に活性化した時期でもありましたが、当時活躍した作家や画家たちが戦後の児童文学や絵本を担うようになったため、自らの戦争責任を検証しにくい部分もあったと思います。実際、いろいろな立場の人が戦争に協力せざるを得なかった時代でした。児童文学作家の山中恒さんが、ご自分が軍国少年だったことの原因を検証するために当時の絵本や子ども文化資料を膨大に収集されているので、今日はそのなかから一部をスライドで紹介いたします。

日本では、大正デモクラシーのもとで「赤い鳥」をはじめ、子ども向け雑誌が相次いで刊行、武井武雄により「童画」という概念も確立され、絵本文化が花開きます。ところが1931年の満州事変をきっかけに日本は中国に侵略を始め、1932年に上海事変が起きます。その際「爆弾三勇士」という、爆弾を抱えた3人の男が鉄条網を爆破したこと(実際は爆破装置の設定ミスによる爆死)を美談として紹介する絵本が出されると、類似の本が何冊も続き、「爆弾三勇士」の映画や紙芝居、グリコのおまけの文鎮までできました。1936年に創刊され人気を博した「講談社の絵本」を含め、絵本全体で軍国調のものが徐々に増えていきます。1937年に日中戦争が始まり、翌年4月に国家総動員令が公布されると、内務省は「児童読物改善二関スル指示要綱」を発

表し、絵本や漫画の表現規制を具体的に始めます。『ススメヒノマル』『ヘイタイゴッコ』など、防火訓練や野営、パラシュートで子どもの好奇心を刺激し、遊びのなかでの「戦争ごっこ」へ憧れを誘



「ヘイタイゴッコ」
黒崎義介・絵
渡邊哲夫・文 昭光社
1942年 山中恒蔵

いながら、戦意高揚と国威発揚、天皇のために命をささげることが徹底的にすりこむわけです。昔話やものがたり、童謡など、美しいものや希望を子どもたちへ伝えてきたはずの絵本が、戦時下では、戦意高揚と皇国史観などを植え付けるメディアとして利用された。この事実を忘れずに、これからの絵本を考えていきたいと思います。」

2017年12月10日(日) 寺本美奈子講演会 「印刷技術から見るちひろの歩み」

開催中の展覧会「ちひろの歩み」に合わせ、キュレーターの寺本美奈子さんに、印刷技術の視点からいわさきちひろの画業や絵本づくりについてお話し頂きました。(徳永美幸)

紙芝居

ちひろが活躍し始める1960年代の高度経済成長期には、絵柄の印刷には、現代の印刷技術の中心となるオフセット印刷が普及します。製版工程も機械化され、印刷の高速化が進みます。ですが、ちひろが駆け出しだった1940年代後半から1950年代初頭は、依然、手作業に依るところが多く、画工が手作業で原画を写し、目で見て、印刷に使用する色数に分解する「描写石版」(描き版)という製版方法が主流でした。

紙芝居『雪の女王』(童心社) 1954年初版の、描き版の画像を拡大すると、スクリーントーンのような模様が見えます。微妙な色の掛け合わせをつくる「網伏せ」という技術です。また、原画には線状の押し跡が見えます。これは原画の上に薄い紙を置いて鉄筆でトレースした跡です。



描き版での紙芝居「人魚ひめ」(童心社) 1960年



写真製版での紙芝居「人魚ひめ」(童心社) 1976年

1960年の『人魚ひめ』初版も、まだ描き版でした。ちひろの絵のように淡いにじみのグラデーションが多いと、どこに色の境目を持つてくるか、考えるだけでも大変で、画工の頑張りがよくわかります。王子の髪の毛の部分では、描き版と1976年版の写真製版との違いがよくわかります。描き版の淡い色のグラデーションは、色の境目を強引につくっています。そうせざるを得なかったのです。これらはちひろの意思に関係なく、当時の技術がこういったものだった、という例です。

雑誌「子どものしあわせ」

次に、ちひろの印刷物に対する意思が入ってくる例です。

雑誌「子どものしあわせ」(草土文化)の表紙は、1963年当初は、予算の都合でフルカラー(4色)印刷ができず、3色刷りになっています。この仕上がりにちひろは満足できず、印刷された時にどう見えるか、印刷の再現性を考慮して原画を描いていました。その後デザイン的な要素を加えながら2色で印刷、1969年からフルカラー印刷となっています。

「子どものしあわせ」
1965年8月号表紙「子どものしあわせ」
1969年6月号表紙

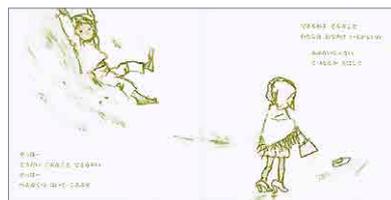
ちひろは、「私の絵は原画を特定の人に楽しんでもらうのでなく、みんなのために描いていて、印刷されてはじめて目に届くから、印刷技術に左右されるのはしかたがない」と語っていたそうです。

至光社の絵本

至光社の絵本シリーズは、ちひろが編集者・武市八十雄氏とともに、隅から隅まで、つくりたいと思った絵本を、つくりたいやり方で出版した本だと感じました。

このシリーズは基本的に7色を使って印刷されていることが多く、墨を使っていない本もあります。

『となりにきたこ』は、表紙に墨を使っていますが、本文には使っていません。



『となりにきたこ』(至光社) 1970年

全部フルカラーにせず、7色のページ、2色のページ、7色、2色と交互に展開させるなど、シリーズのなかでも、それぞれの本でしつらえを変えています。

『となりにきたこ』の印刷所の現場指示書によると、6種類のパターンで印刷

が行われていて、1冊の絵本としては、かなり凝ったつくり方です。

『あめのひのおるすばん』では、絵だけでなく文字にも注目です。「すぐっていったのに まだかしら」ここだけゴシックです(他は明朝体)。女の子の気持ちをゴシックにしているのです。



『あめのひのおるすばん』(至光社) 1968年

4作目『ことりのくるひ』では、ゴシックは使っていませんが、グレーの文字のページのなかに、墨色の文字のページがあります。墨色にすることで、なんとなく強い引っ掛かりとして目に入ってくる、一見気づかないようなささやかな工夫を施しているのです。

「おかあさんはいそがしいし くまはしゃべってくれないし」「だけど だけど ことりが ほしいの」という、少女の強い気持ちを文字で目立たせた。ただ、ゴシックほど強調せず、あくまでも少女の気持ちの流れのなかで表現しています。

印刷から見ても、噛めば噛むほど深い味わいのある絵本だと思います。



『ことりのくるひ』(至光社) 1972年

「絵本でなければできないようなことをしよう」と呼びかけた武市氏とともに、このような細やかな絵本づくりを行っていたのです。

「どんなにバッテリーが冒険してかってなことをやっても、ぜったいに美しく製版・印刷してだしてくるのです。絵本づくりも野球と同じで、チームワークがたいせつだということを身にしみて感じました。」(いわさきちひろ『あめのひのおるすばん』あとがきより1968年)。自分の絵が印刷されることに対して、深く関わって作品を制作していたことが解るちひろのことばです。

至光社の絵本の「奥付」には、印刷や製本の会社だけでなく、通常は記載しない、進行や製本管理、写真植字担当者名まであります。ここからもちひろが印刷を楽しみ、自身の絵とコラボレートさせていたことがよく分かります。

ひとこと ふたこと みこと



11月19日(日)
結婚したばかりのころ初めて訪れ、こんなふうになが子を抱ける日がきたら、と思いました。次に来たのは息子が6歳になったころ。「立てひざの少年」が自分にそっくりだと本人が気に入って、ずっと部屋に飾っています。現在、息子は12歳になり受験を控えています。ちひろさんの絵のなかには、私が入って、息子がいて、母がいます。いつか息子もちひろさんの絵のなかには私を見つけてくれたら、とてもしあわせです。(サチエ)

12月15日(金)
遠方から訪れたのですが、偶然にもちひろさんの誕生日でした。私は嫁ぐときに実家からちひろさんの色紙をもらったことがあります。幼いころの私に似ていると母

が買ったものです。ちひろさんが描く子どもは、母親の目にどこかしらわが子を思わせるのではないのでしょうか。ちょっと面映ゆいですが、大切に飾っています。

* * * * *

ちひろさん、お誕生日おめでとうでございます。今日もちひろさんの絵を見てやさしい気持ちになりました。「日本の絵本100年の歩み」展に出ていた丸木俊さんの『ひろしまのピカ』は読んだことのない本でしたが、涙が止まりませんでした。人が人を殺す戦争は、あってはいけないことです。突然、幸せを奪われた小さなみいちゃんを想うと、胸が張り裂けそうでした。語り継がれるべき「戦争」と、「平和」について考えるきっかけになりました。

(日本の絵本100年の歩み 感想ノートより)

11月24日(金)
スズキコージさんの『やまのディスコ』が最高でした。私は貧乏学生だったのでディスコに行ったことはありませんし、小学生の娘も、当然知りません。でも二人で展示室の絵本を読んでクスクスして、大笑いを我慢するのが大変なくらいおもしろかったです。(minae)

11月26日(日)
私が小学校に入学した終戦直後、カラーの絵本はどこかの家の焼け残った「講談社の絵本」のみ。「岩波子どもの本」もボロボロの紙でした。子や孫たちのためにどっさり絵本を買ったのは、自分の幼少期の欲求不満を解消するためだったのかもしれない。

(1940年生まれ77歳女)

美術館 日記



11月8日(水) ☁
開館40周年記念展Ⅳ「日本の絵本100年の歩み」初日。美術館活動の節目の年に日本を代表する絵本作家の方々の作品を一堂に展示できることに感謝しつつ、閉館後には関係者レセプションを開催。田島征三さんや長野ヒデ子さん、村上康成さん等出品作家の方々の声もうかがうことができた。

11月26日(日) ☀
本日は、年に一度の支援会員の日。松本猛による講演会「母、いわさきちひろ」の後、美術館の活動を日ごろから支えてくださる会員の方々への報告・交流会を開催。

11月29日(水) ☀
板橋区立美術館で展覧会を開催中のインドの出版社 Tara Books のギータさんらが来館。少数民族の芸術やインド各地の民話などを

子どもたちに残したいと作り始めた手すきの紙を使った手刷りの絵本は、世界中で高く評価されている。インドでの出版活動についてのお話をうかがいながら、社会にも影響を与える彼女たちの絵本づくりへの情熱に感銘を受けた。

12月17日(日) ☀
入館無料の感謝デー、900名以上のお客様が来館。入館100人目ごとのプレゼント企画では、「ちひろくん」が当選する一幕も。

1月3日(水) ☀
恒例のお正月水彩技法ワークショップ「にじみのぼち袋」を昨日から2日間にわたり開催し、160名以上のお客様に楽しんでいただく。5歳のお子さんから年配の方まで、幅広い年齢層の方々が、完成した色とりどりの作品を手に、笑顔で会場を後にした。

1月23日(火) ☀
昨日午前から降り始めた雪は一晩降り続き、都内各地で23cmを超える積雪に。午前10時の開館時刻まで、雪かき作業に出勤スタッフ全員で奔走。街にもたくさん雪が残るなかご来館くださるお客様に、感謝の気持ちでいっぱい。



1月23日朝の中庭

1月31日(水) ☀
展示最終日。平日にも関わらずたくさんのお客様をお迎えし、カフェ限定メニューも完売。人気だったカカオ香るくちどけのよい「ムース・ショコラ」は、いつかまたメニューに登場させたい。

窓

「台湾発 世界中の子ども みんなに平和としあわせを」

竹迫祐子(公財)いわさきちひろ記念事業団事務局長

この2月1日から、生誕100年を記念して、台湾台北市の国立歴史博物館で「童・楽一岩崎知弘経典挿畫展」と題して、アジアで初のいわさきちひろの原画展が始まりました。

年配の人には日本語を話す方も多く、また、ドラマやアニメーションを通じて日本文化に親しむ若い世代も少なくない台湾。人柄が穏やかで、食べ物おいしく、どこか懐かしい風情の残る台湾は、日本から距離的にも近く、活気ある都会と雄大な自然がともに楽しめる人気の観光地。年間150万から190万人の日本人が訪れています(日本政府観光局統計)。

台湾の起源は、先史時代以前に遡りますが、歴史的には長く中国の支配が色濃く、また、17世紀にはオランダの植民地ともなりました。日本は、日清戦争の勝利で台湾の割譲を受け、周知の通り1895年から1945年まで統治し、「同化政策」を行いました。同化政策では、日本並みのインフラ整備として、上下水道の設置、ダム建設や治水工事、鉄道の敷設を行ったほか、学校教育の普及等、近代化に貢献した側面もあります。一方で、日本語教育や日本名の使用を強制する等植民地支配を行いました。独立を願う抗日運動は武力で抑え、太平洋戦争がはじま

ると南方への重要拠点と位置付けました。

1971年に国連で中華人民共和国が承認され、今の台湾は中国の一部として微妙な位置にあります。地勢的にも、東アジアの緊張のただなかにある台湾です。

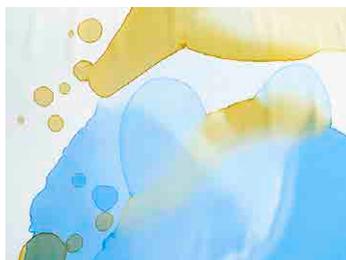
そこから、「子どもの幸せと平和」を願って子どもを描きつづけた画家・いわさきちひろの展覧会をぜひ、今、開催したいという要望が、突然寄せられたのは昨秋。驚きつつも、平和が脅かされる危機感が高まる時代に、日本からも台湾からもちひろの願いを発信したいと、両国の関係者の熱い思いがこの展覧会を実現させました。

●次回展示予定 2018年5月19日(土)～7月22日(日)



いわさきちひろ 緑の風のなかで 1970年

いわさきちひろ生誕100年「Life」展
着るをたのしむ spoken words project



spoken words project 布作品B 1

いわさきちひろは、おしゃれ心を大切にされた女性でした。spoken words project(スポークンワーズプロジェクト)はちひろのセンスに着目し、新たに作品としての生地や服をつくります。巧みな線や水彩の技術、強しなやかな女性としての生き方——いわさきちひろの世界観が、現代のファッションとして蘇ります。

spoken words project

デザイナーの飛田正浩主宰のファッションブランド。手作業を活かした染めやプリントを施した服づくりに定評がある。現在〈PUMA〉など他ブランドとのコラボレーションや新ブランドの立ち上げ、芸術祭への参加など、その表現領域は多岐にわたり、アパレルブランドの枠を超えて活躍している。

ちひろ美術館・東京イベント予定 <https://chihiro.jp/> <https://www.facebook.com/chihiro.tokyo> ちひろ美術館
各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。
※イベント申し込みは、先着順です。また、参加費が記載されていないイベントは無料です。TEL.03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

〈展示関連イベント〉

●大巻伸嗣アーティストトーク

- 日 時：4月21日(土) 15:00～
- 講 師：大巻伸嗣(現代美術作家)
- 定 員：60名 **要申し込み 3月21日(水)受付開始**
- 参加費：600円



〈参加自由、無料のイベント〉

●松本猛ギャラリートーク

- ちひろの息子である松本猛が、作品にまつわるエピソードなどをお話します。
- 日 時：4月1日(日) 15:30～
- 講 師：松本猛
(絵本学会会長・ちひろ美術館常任顧問)



撮影：島崎信一

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日 14:00～

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日 11:00～

●わらべうたあそび

リズムにあわせて体を動かしたり、声を出して歌ったり。物語への入り口となる「わらべうた」を親子で楽しみましょう。



- 日 時：4月21日(土) 11:00～11:40
- 講 師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰)
- 対 象：0～2歳までの乳幼児と保護者
- 定 員：15組30名 **要申し込み 3月21日(水)受付開始**
- 参加費：無料(大人は別途入館料)

『いわさきちひろ生誕100年 Life Chihiro Iwasaki 100』

いわさきちひろ生誕100年「Life展」のコンセプトブックです。ちひろの絵やことばのほか、コラボレーション作家のインタビューも収録しています。

発行：公益財団法人いわさきちひろ記念事業団
2018年3月1日刊行予定
価格：1300円(税別)

Life展パスポート

すべての「Life展」に何度でも入館できるパスポートです。

販売価格：1000円(税込)
販売場所：ちひろ美術館(東京・安曇野)
利用期限：2019年1月31日まで
(安曇野は2018年12月16日まで)



支援会員制度のご案内

当財団では、ちひろ美術館の充実した活動をさらに推進していくために、個人の方の寄付制度として、「支援会員制度」を設けています。

1口以上のご寄付をいただいた方を、1年間、支援会員としてご登録いたします。
【会費】1口 3000円 (1口以上)



お寄せいただいた会費(寄付金)は、散逸しやすい絵本原画の収集・保存・研究・展示公開、地元学校との提携活動や出前授業、出張美術館など、広く絵本の普及や国内外での絵本文化支援活動のために使われます。ちひろ美術館の活動を、継続的にご支援いただく「支援会員」となってくださることを、心からお願いいたします。

CONTENTS 〈展示紹介〉いわさきちひろ生誕100年「Life展」まなざしのゆくえ 大巻伸嗣…2⑤

いわさきちひろ生誕100年「Life展」…4

〈活動報告〉小野明×土井章史対談／野上暁講演会…5／寺本美奈子講演会…6

ひとことふたことみこと／美術館日記／窓「台湾発 世界中のこども みんなに平和としあわせを」…7

美術館だより No.200 2018年2月23日